

新型コロナウイルスワクチン接種後に慢性炎症性脱髄性多発神経炎と診断された1例

◎林 智剛¹⁾、伊藤 亜子¹⁾、加藤 遼¹⁾、中山 純里¹⁾、藤本 伸吾¹⁾、稲田 隆行¹⁾、関根 綾子¹⁾、菊地 良介¹⁾
国立大学法人 岐阜大学 医学部附属病院¹⁾

【はじめに】慢性炎症性脱髄性多発神経炎（chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy: CIDP）とは、2か月以上にわたる四肢筋力低下と感覚異常をきたす後天性の免疫介在性末梢神経障害である。今回、我々は新型コロナウイルスワクチン接種後に CIDP と診断された症例を経験したので報告する。

【症例】10代、男性【主訴】両上肢の筋力低下

【既往歴】川崎病【家族歴】特記事項なし

【現病歴】20XX年X月中旬、新型コロナウイルスワクチン1回目を接種後、徐々に右手の筋力低下を感じたが、触覚・温覚に異常はなかった。同年X+1月中旬に新型コロナウイルスワクチン2回目を接種した。同年X+3月末に左手の筋力低下も感じたため整形外科を受診し、握力7~8kgと著明な低下が認められたため、精査目的のため当院へ紹介入院となった。

【検査結果】髄液検査にて総蛋白107 mg/dl 総細胞数 8/μl と蛋白細胞乖離を認めたが、その他各種生化学検査では異常を認めなかった。神経伝導検査（nerve conduction study: NCS）では、運動神経伝導検査で正中神経が遠位潜時延長

および伝導速度遅延を認め、尺骨神経で伝導速度遅延と伝導ブロックを認めた。F波検査では、右正中神経で潜時延長と出現率の低下、右尺骨神経で出現率の低下を認めた。感覚神経伝導検査は、右正中神経、右尺骨神経ともに低振幅と伝導速度遅延を認めた。身体所見およびNCSの結果より、脱髄性の神経障害であるCIDPが疑われた。

【経過】免疫グロブリン静注療法が施行された。初回の治療より、緩徐であるが握力改善を認めた。また、NCSでは脱髄所見の改善も認めた。

【考察】これまでにインフルエンザワクチン接種後にCIDPを発症したとの報告や、新型コロナウイルスワクチン接種後にギランバレー症候群を発症したとの報告がある。CIDPは、治療可能な疾患であるためNCSによる早期発見・早期診断が重要である。また、NCSを用いての経時的評価は治療効果を確認するのに有用であると考え。

連絡先：岐阜大学医学部附属病院 検査部(058-230-7261)